

<研究論文>

# 学童保育での生活におけるおやつの役割に関する研究

## The Role of Snack in the Life of After School Care

嵯峨美咲・松本歩子・花輪由樹

Misaki Saga, Ayuko Mastumoto, Yuki Hanawa

【目的】本研究では学童保育における「おやつ」の役割に着目し(1)提供実態と指導員の意識、(2)子どもたちの様子、(3)卒所生の評価、を把握することを通して、今後の放課後児童対策におけるおやつの役割を考察する。【方法】(1) 大阪市X区の学童保育8カ所(A～H施設)の主任指導員へおやつの実態に関するアンケートと簡易インタビュー、D施設の主任指導員への半構造化インタビュー、(2) D施設での参与観察、(3) D施設卒所生へのWeb アンケートを実施した。【結果】(1) 指導員はおやつの時間に「食育の機会」や、「子どもが主体的にかかわる機会」を設けていた。また楽しく、子ども同士のコミュニケーションの場となるよう意識し、内容や開始時間を調整していた。(2) 子どもたちはおやつでの経験を通じた話題をきっかけに、異年齢で多くの会話が生まれていた。(3) 卒所生の回答者全員がおやつは必要な時間だと認識し「仲間と会話が弾む時間だから」、「調理や片付けなど生活力が身に付くから」などと評価していた。【考察】学童保育でのおやつは、食事で不足する栄養素を補うだけでなく、集団生活の中での、コミュニケーションのツールとしてや生活力を身に付ける機会としての位置づけが大きい。よって、アレルギー児童への対応など安全性を確保しながら、指導員が主導で活動計画に位置付け、実施していくことが望まれる。

キーワード：学童保育（放課後児童クラブ） 食環境 おやつ 食育

## 1 はじめに

### 1-1. 研究背景

放課後児童クラブ運営指針<sup>注1)</sup>において放課後児童クラブ（以下、学童保育）<sup>注2)</sup>における育成支援は「子どもが安心して過ごせる生活の場としてふさわしい環境を整え、安全面に配慮しながら子どもが自ら危険を回避できるようにしていくとともに、子どもの発達段階に応じた主体的な遊びや生活が可能となるように、自主性、社会性及び創造性の向上、基本的な生活習慣の確立などにより、子どもの健全な育成を図ること」が目的として位置づけられている（第1章総則）。学童保育では「休息、遊び、自主的な学習、おやつ、文化的行事等の取り組み、基本的な生活に関すること等、生活全般に関わることが行われる」<sup>注3)</sup>が、なかでも「おやつ」は96.3%の学童保育で提供されているというデータがある<sup>注4)</sup>ことから、日々の学童保育における生活行為のひとつとして大きく位置づけられてきたといえる。

そもそも子どもにとっての「おやつ（間食）」は、胃の内容量が小さいために3回の食事では補いきれない栄養素を補う「①栄養面での役割」とともに、食べることの楽しさや喜びを他者と共有したり、休息や気分転換の場となる「②精神面での役割」、そして正しい手洗い方法や、衛生的な食品の取り扱い、マナーなどが身に付きやすく、手作りなどによって食への関心を高めることができる「③教育面での役割」があ

表1-1 運営指針における「おやつ」の取り扱い

<p>第3章 放課後児童クラブにおける育成支援の内容</p> <p>1. 育成支援の内容</p> <p>(4) 子どもにとって放課後児童クラブが安心して過ごせる生活の場であり、放課後児童支援員等が信頼できる存在であることを前提として、放課後児童クラブにおける育成支援には、主に次のような内容が求められる。</p> <p>⑦ 子どもにとって放課後の時間帯に栄養面や活力面から必要とされる「おやつ」を適切に提供する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 発達過程にある子どもの成長にあわせて、放課後の時間帯に必要とされる栄養面や活力面を考慮して、おやつを適切に提供する。「おやつ」の提供に当たっては、補食としての役割もあることから、昼食と夕食の時間帯等を考慮して提供時間や内容、量等を工夫する。</li> <li>・ 「おやつ」の提供に際しては、安全及び衛生に考慮するとともに、<u>子どもが落ちついて食を楽しめるようにする。</u></li> <li>・ 食物アレルギーのある子どもについては、配慮すべきことや緊急時の対応等について事前に保護者と丁寧に連絡を取り合い、安全に配慮して提供する。</li> </ul>
<p>5. 育成支援に含まれる職務内容と運営に関わる業務</p> <p>(2) 運営に関わる業務</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「おやつ」の発注、購入等</li> </ul>
<p>第6章 施設及び設備、衛生管理及び安全対策</p> <p>2. 衛生管理及び安全対策</p> <p>(1) 衛生管理</p> <p>○ 施設設備や「おやつ」等の衛生管理を徹底し、食中毒の発生を防止する。</p>
<p>(2) 事故やケガの防止と対応</p> <p>○ 「おやつ」の提供に際して、食物アレルギー事故、窒息事故等を防止するため、放課後児童支援員等は応急対応について学んでおく。</p>

とされている<sup>1) 2)</sup>。つまりは、学童保育ではおやつの時間においても、育成支援の目的に挙げられる「発達段階に応じた主体的な生活が可能となるように、自主性、社会性及び創造性の向上、基本的な生活習慣の確立などによって、子どもの健全な育成を図る」機会となることが想定される。

しかし、放課後児童クラブ運営指針において、おやつについて明記されているのは表1-1で示す箇所のみであり、下線部（筆者加筆）の「子どもが落ちついて食を楽しめるようにする。」という箇所、精神面からの視点が含まれている以外は、栄養面、衛生管理及び安全対策からの取り扱いであり、その他視点からのおやつ役割や提供方法についての言及はなされていない。

学童保育におけるおやつに関する先行研究には、寺嶋<sup>3)</sup>や吉村<sup>4)</sup>が栄養面からおやつ提供内容と栄養価の実態を明らかにした研究だけでなく、高橋らが<sup>5)</sup>行った指導員を対象にしたおやつ提供への意識調査や、秋武ら<sup>6) 7) 8)</sup>が指導員と保護者へ行ったおやつ役割に対する意識調査など、栄養面以外の観点からおやつ役割について考察する研究も行われている。特に、秋武らの「おやつ役割として指導員、保護者ともに栄養的役割よりも精神的役割や教育的役割を重視している」<sup>6)</sup>という結果や、おやつ時における“おやつを食べない選択と過ごし方”“おやつ量の選択”という児童の自由度の観点からの分析<sup>7)</sup>、高橋らの「指導員は子どもが主体的におやつに関わる「手創り」おやつの実践など、単に食物だけではなくおやつ時間の営み全体を再考することが必要」<sup>5)</sup>という指摘は興味深い。ただしこれら先行研究では指導員や保護者への意識調査からの分析であり、学童保育の生活主体者となる子どもたちの実態は十分反映されているとはいえない。よって、今後、学童保育のおやつ役割等をより具体的に位置づけるためにも、子どもの実態・意識も踏まえた考察が必要であると考えられる。

表 1-2 調査施設の概要及び調査日一覧

施設名	運営	指導員数 (アルバイト・パート含む)	1日の 指導員数	受入学年	登録 児童数	調査日
A	社会福祉法人	7人	4人	1年生～3年生	46人	7月31日
B	保護者	5人	3人	1年生～6年生	31人	7月26日
C	保護者	6人	4人	1年生～6年生	27人	7月27日
D	保護者	8人	2～3人	1年生～6年生	23人	7月25日
E	保護者	3人	3人	1年生～6年生	23人	7月27日
F	保護者	4人	3人	1年生～6年生	23人	7月26日
G	保護者	4人	3人	1年生～6年生	17人	7月25日
H	保護者	4人	2人	1年生～6年生	12人	7月26日

### 1-2. 研究目的

研究背景を踏まえ、本研究の目的を、学童保育における「おやつ」の栄養面以外の役割に着目し(1) おやつの実態と指導員のおやつへの意識を把握する、(2) おやつ時の子どもたちの様子を明らかにする、(3) おやつに対する卒所生の評価を把握する、(4) 今後の放課後児童対策におけるおやつを考察する、の4点とする。

### 1-3. 研究方法

研究目的を達成するため、(1) については戦後、全国で初めての学童保育が誕生したとされる大阪市を対象とし、なかでも比較的施設数が多いX区の学童保育8カ所(A～H施設)の主任指導員へおやつの実態に関するアンケート調査を持参し、その場で記入いただきながら簡単なインタビューを実施した(表1-2参照)。また、特におやつへの意識が高いと判断されたD施設の主任指導員(指導員歴23年)へは、追加調査として2017年12月4日に半構造化インタビューも実施した。(2) については、D施設において平日3日間(2017年12月4、7、8日)実施した参与観察から把握した。(3) については、D施設のOB・OG会のメンバーである17歳～33歳の卒所生22名(男子16名、女子6名)を対象としたGoogleフォームによるWebアンケート調査から12名(回答率54.5%)の意見を把握した。(4) については、(1)(2)(3)の結果から各地の事例や情勢を踏まえて検討することとする。

## 2 学童保育におけるおやつの実態

### 2-1. おやつの実態の有無とおやつでの子どもの役割(表2-1)

今回対象とした8施設全てにおいて、おやつが「毎日提供」されており、季節に合わせた内容も検討されていた。また、「おやつでの役割」として5施設で子どもたちに「おやつ当番」の制度を設けており、「机を拭く」「お皿の用意」「メニューを決める」「おやつ配膳」「『いただきます』の挨拶」「お皿を洗う」などの役割が与えられていた。また、「おやつメニューの決定」について保育所に併設する1施設では「給食室の大人」がすべて決定していたが、4施設では「時々子どもに」、3施設では「毎回子ども」に決めさせていた。「配膳」についても、指導員が毎回しているのは1施設のみで、「時々子ども」が2施設、「毎回子ども」が4施設であった。

### 2-2. 学童保育の生活時間とおやつとの関係性(表2-2)

「おやつ時間」については、開始時間は、多くの施設が子どもたちの揃う時間を基本としていた。学

表 2-1 おやつ提供の有無とおやつでの役割

施設名	おやつ提供		おやつでの役割		
	毎日提供	季節のもの提供	おやつ当番	メニュー決定者	配膳者
A	○	○	○	給食室	毎回子ども
B	○	○	○	毎回子ども	毎回子ども
C	○	○	○	毎回子ども	毎回子ども
D	○	○	○	時々子ども	毎回子ども
E	○	○		時々子ども	毎回指導員
F	○	○		毎回子ども	毎回子ども
G	○	○	○	時々子ども	時々子ども
H	○	○		時々子ども	時々子ども

表 2-2 学童保育開設時間とおやつ時間

施設名	おやつ開始	所要時間 (指導員の評価)	基本開設時間	延長時間	延長利用数(割合)
A	15時30分	30分(長い)	～18時	～20時	23人(50.0%)
B	16時	30分(適切)	～19時	～20時	10人(32.2%)
C	16時	30分(適切)	～18時	～20時	11人(40.7%)
D	夏16時30分 (冬17時30分)	30分(適切)	～18時15分	～19時15分	15人(65.2%)
E	16時30分	30分(適切)	～18時	～19時30分	17人(73.9%)
F	16時	30分(適切)	～18時	～19時	12人(52.2%)
G	16時	30分(適切)	～19時	～20時	4人(23.5%)
H	16時	30分(適切)	～20時	なし	延長なし

表 2-3 おやつ時間の決まり

A	きちんと待っているグループからおやつをもらう(子どもが考えたルール)
B・C	全員で「いただきます」を言う
D	できるだけ揃って「いただきます」を言う、正座して行儀よく食べる、嫌いなものも少しでもいいので食べれるよう促す、食べ終わった子はそれぞれに「ごちそうさま」を言う、自分のお皿は自分で洗う。
E・F	自分で食器を片付ける
G	行儀よく食べる
H	ちゃんと座る、くちゃくちゃ音を立てて食べない、下品な会話をしない、肘をつかない、自分の事も人の事も考えて行動する

童保育所の基本開設時間や延長時間、延長保育利用者割合などからも、学校給食と夕食のおおよそ中間の時間帯に設定されていることがわかる。いずれの施設もおやつにかかる時間は30分程度であったが、その時間設定の妥当性に関する指導員の評価において7施設では「適切」と評価しているのに対し、A施設のみ「長い」と感じていることが把握された。これは、A施設のみ全員が食べ終わるまで席で待つことがルール化され、食べ終わった児童から次の活動を行うといった自由度がないことが関係しているようである。またD施設への追加調査より、小学校の授業時間数の増加にともない下校時間が遅くなった影響で、おやつの開始時間が以前よりも遅くなったこと、日が暮れるのが遅い冬には、外遊びのまとまった時間を確保するために、おやつの時間を遅らせる工夫をしていることが把握された。

### 2-3. おやつ時間の決まり(表 2-3)

おやつ時間の決まりについては、あいさつや食事の姿勢など食事のマナーや片付けなど生活力を身に付けることができる内容となっていることが把握された。

表 2-4 手作りおやつの実態

施設名	手作りの実施	季節に合わせた提供	メニュー決定者	材料購入者	調理者	平均所要時間	おやつ時間の変更
A	○	○	毎回子ども	毎回子ども	毎回子ども	60分	○
B	○	○	毎回指導員	時々子ども	時々子ども	60分	○
C	○	○	毎回子ども	時々子ども	毎回子ども	90分	○
D	○	○	時々子ども	時々子ども	時々子ども	45分	
E	○	○	時々子ども	毎回指導員	時々子ども	60分	○
F	○	○	毎回子ども	毎回子ども	毎回子ども	60分	
G	○	○	時々子ども	毎回指導員	時々子ども	90分	
H	○	○	時々子ども	毎回指導員	時々子ども	30分	○

表 2-5 1か月のおやつ提供例(D施設)

●：手作りおやつ

2017年1月のおやつ表		18日(水)	市販のおやつ、ヨーグルト
4日(水)	市販のおやつ	19日(木)	50円おやつ、お魚ウィンナー
5日(木)	50円おやつ、ポタージュスープ	21日(土)	●からあげ
6日(金)	市販のおやつ	23日(月)	市販のおやつ、りんご
7日(土)	●チョコドーナツ	24日(火)	市販のおやつ、ヤクルト
10日(火)	市販のおやつ、ゼリー	25日(水)	●チョコバナナ
11日(水)	●ぜんざい	26日(木)	50円おやつ、いちご
12日(木)	50円おやつ、ヤクルト	27日(金)	●揚げもち
13日(金)	●ツナサンドパン	28日(土)	市販のおやつ
14日(土)	市販のおやつ	30日(月)	市販のおやつ
16日(月)	市販のおやつ、みかん	31日(火)	●ココアチップスクッキー
17日(火)	●うどん	計	8/22回

## 2-4. 手作りおやつの実施状況 (表 2-4)

手作りおやつについては、頻度の違いはあるもののすべての施設で実施されており、季節に合わせた内容の提供が行われていた。さらに、子どもが手作りおやつに関われるよう、メニュー決めや材料の購入、おやつの調理を指導員と一緒にいたり、子どものみで行わせたりするという回答が多くみられた。このことから、子どもたちが食に関心・意欲を持ち、主体的に関わることができる食育の機会が設けられていることが把握できた。ただし、手作りおやつにした場合、その開始時間については「通常時のおやつの開始時間と異なる」と回答した施設が5施設あった。「おやつの調理時間」については、短い所で30分、長い所で90分であり、平均60分程度かかっていた。

なお、D施設では週2回の頻度で手作りおやつを提供しており、主任指導員が毎月発行する「おやつだより」にて前月の献立とレシピを掲載することで、保護者にも手作りおやつの内容を伝えている。例として2017年1月の献立を表2-5に示す。手作りおやつのメニューの中には、製菓だけでなく、軽食となるような「うどん」や「からあげ」なども提供されている。

## 2-5. おやつ献立の工夫

D施設では前述の表2-5のように1か月のおやつが提供されている。

「市販のおやつ」では、あらかじめ指導員が購入している複数のお菓子の中からおやつ当番が選ぶ3種類が提供される。

「50円おやつ」は、近所に駄菓子屋があった時代にはじまった取り組みである。かつては指導員から一人ひとりが50円玉をもらい、班ごとに実際に駄菓子屋へ行き、自分でおやつを選んで購入していたが、現在は近所の駄菓子屋がなくなったため、指導員が事前に購入している10円～50円までのおやつを、おや

表 2-6 指導員がおやつ時間に大切にしていること

A	仲間と一緒に楽しく食べる。その時間を共有する。
B	話しながら食べる
C	コミュニケーション
D	みんなでの時間の共有。食べる楽しみ、作る楽しみを味わう。季節を感じる。おやつ時間に全体への話などをする。クールダウンの時間。
E	行儀よく食べる。楽しく食べる。手作りの際は食育を意識する。
F	楽しい時間になるように。作ってもらったもの、作ったものは大切に食べる
G	毎日できる限り手作りおやつで温かく、美味しく、季節のものを出す
H	温かいものは温かいうちに。食育。

つ当番がお店の店員として値段別に部屋の机に並べ、班ごとに選びに来よう呼びかけるようにしている。指導員は「自分の空腹具合で判断することができる。子ども同士で楽しみながらおやつを選ぶ。」というねらいをもってこの取り組みを実施していた。駄菓子屋に買いに行っていたころは子どもたちに着色料の入ったおやつは選ばないようにも伝えていたが、現在は指導員が着色料の含まれていないおやつのみを選択し購入している。

なお、火・金曜日が「手作りおやつ」、木曜日が「50 円おやつ」であることが基本であるが、実情に合わせて変更がある。また市販のおやつ、50 円おやつの日にも、栄養が偏らないように果物や乳製品を月に平均 6 回以上（2017 年 1 月は 9 回）、市販のおやつと合わせて提供できるよう用意されている。

## 2-6. 指導員がおやつ時間に大切にしていること

指導員がおやつ時間に大切にしていることについては、「楽しく」（A, D, E, F）「みんなで・共有・会話」（A, B, C, D）というキーワードがいずれも 4 施設から得られた。おやつを食べることを通して人との関わりを深め、楽しい時間になるように指導員は意識していることが伺えた。さらに、おやつを作る場合には食への関心や、季節の食べ物に対しての興味や関心が深まるように食育を意識していることも把握された。

## 3 学童保育でのおやつ時の子どもたちの様子

2017 年 12 月に D 施設において、「市販おやつ」、「50 円おやつ」、「手作りおやつ」の日にそれぞれ参与観察により把握した子ども様子を表 3-1 に示す。なお、調査時にはアレルギー対応が必要な児童は在籍していなかった。

### 3-1. おやつまでの生活の流れ

D 施設には約 200m の距離にある Y 小学校と約 1km の距離にある Z 小学校の 2 つの小学校から子どもたちがそれぞれ徒歩で来所してくる。低学年は 15 時頃来所するが、高学年は 16 時頃来所していた。また習い事に立ち寄ってから来所する子どももいた。来所後は手洗いうがい、連絡帳の提出、宿題とすることが決まっており、宿題がすんだ子どもから自由に遊べる時間となる。指導員とともに外の公園へ遊びに出かけたり、部屋の中で思い思いに遊んだりしている様子が見られた。17 時過ぎに外遊びの子どもが部屋に戻ってくるのをきっかけに、おやつ準備の全体への呼びかけが指導員によってなされていた。

### 3-2. おやつ準備について

手作りおやつのうどんは 16 時半頃から 1 人の指導員が準備を始めていたが、その他の日は、外遊びから子どもたちが帰ってくる 17 時過ぎからおやつ当番を中心として、おやつ準備が始まっていた（写真 3-1）。おやつ当番は低学年から高学年まで縦割りで構成した 5 名程度の班である。高学年の子どもたちが関係性を考慮して決めている。おやつ当番は 1 週間単位で交代して担当することになっており、調査時は、班内

表3-1 学童保育でのおやつ時の子どもの様子

	12月4日(月)	12月7日(木)	12月8日(金)
おやつの内容	市販のおやつ(スナック菓子、チョコレート菓子)+きび団子(差入れ)	50円おやつ +りんご1/4個	うどん(一味唐辛子、天かす)
調理行程	なし	皮むき	ゆでる・味付け 味見・盛り付け
おやつ当番で準備した人数	2/5人(おやつ当番)	2/5人(おやつ当番)、 1人(自主的)	2(自主的)
おやつ時の会話内容	・きび団子は抹茶味よりきな粉味の方が美味しい ・クリスマス会の出し物について	・りんごの皮をむく難しさ ・店当番による値段設定の説明 ・当たり付きのお菓子で当たった喜び	・クリスマス会に向けての予定説明 ・天かすと一味唐辛子の量 ・おかわりをした回数
出席者数	17人	15人	17人
おやつ開始時に食べた人数	11人	8人	14人
後から食べた人数	5人	5人	2人
後から食べた理由	宿題が終わっていなかったから。習い事から帰ってきたから	習い事から帰ってきたから。クリスマス会のプレゼント作りをきり良く終われなかったから。	習い事から帰ってきたから。
おやつを食べなかった人数	1人	2人	1人
食べない理由	テレビのダイエットに影響して	おやつ開始前に迎えが来たから。習い事へ行く前にりんごを受けとったから。	19時前に習い事から帰ってきたから
食べない子の居る場所	おやつを食べるところ	—	—
食べない子の過ごし方	クリスマス会の準備をしながら、おやつを食べている子どもと会話	—	—



↑写真 3-1 50円おやつの準備の様子



写真 3-2 子どもによるリンゴの飾り切り↑



写真 3-3 おやつ(うどん)時間の様子↑

で役割を割り振り2人ずつ準備を担当していた。ただし7日のりんごの皮むきや、8日のうどんの調理については、当番以外の興味を持った子どもたちが自主的に準備に加わっている様子が見られた。うどんの味見や盛り付けを楽しむ様子や、以前に教えてもらったりりんごの飾り切りに挑戦し器用な包丁さばきを披露する子も見られた(写真3-2)。

### 3-3. おやつ時の会話内容

50円おやつではどのお菓子を選ぶか値段を聞いたり、計算したり、お菓子の当たりを見つけて喜んだり異年齢で盛り上がっていた。またりんごの皮むきについてもその難しさを語り合う姿が見られた。うどんの日には天かすや一味唐辛子のトッピングについて好みを言い合ったり、おかわりを何回したかを自慢しあう様子が見られた(写真3-3)。市販のおやつの時よりも、選択出来たり、調理に関わることができた

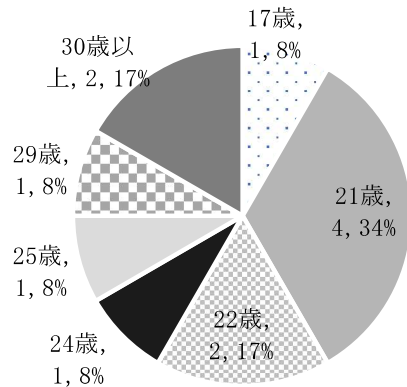


図4-1 回答者の年齢 (n=12)

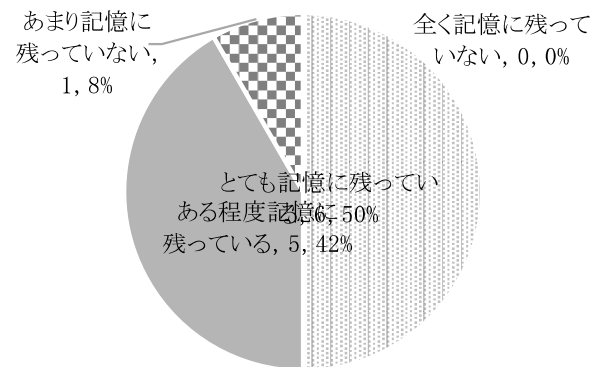


図4-2 学童保育でのおやつ時間の記憶 (n=12)

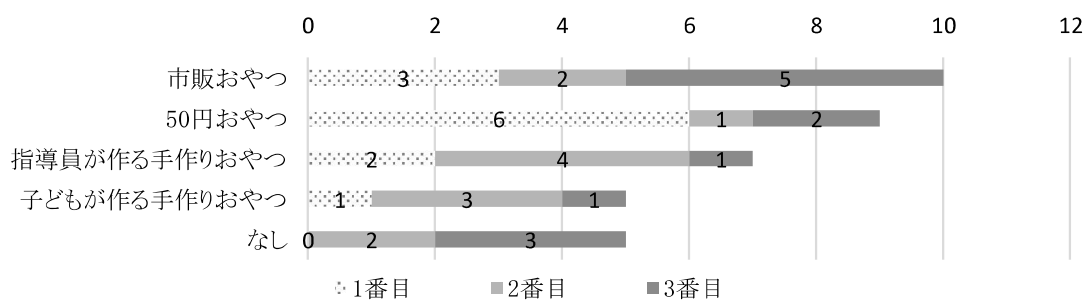


図4-3 記憶に残るおやつベスト3の種類 (n=12×3)

り、味を調整出来たりする時の方が、子どもたち同士の会話も多く、盛り上がりを感じられた。またおやつ時間の間は、クリスマス会の予定など今後の行事について話し合うこともされていた。

### 3-4. おやつ時間への参加

おやつは4日と7日は17時30分、8日は17時20分に集まって食べ始めていたが、いずれの日程も声をかけられたものの、宿題や遊びの区切りがよくないため、後から食べることを選択する子どもの姿が見られた。また食べないという選択をする子もいた。おやつ開始時間は設定されているものの、子ども一人ひとりの意見も尊重する雰囲気が指導員にも仲間にもあることが把握された。

## 4. 学童保育のおやつに対する利用者の認識

### 4-1. 回答者の属性

卒所生へのWebアンケートの回答者の属性について、現在の年齢は図4-1の通り10代が1名、20代が9名、30代が2名で、12名全員が1年生からD施設に入所しており、うち10名が6年生、1名が5年生、1名が3年生までの利用者であった。

### 4-2. 学童保育でのおやつ時間の記憶

学童保育でのおやつ時間の記憶については、卒所してから10年以上経過している者が大半にもかかわらず、とても記憶に残っているが6名、ある程度記憶に残っているが5名で計11名(92%)から記憶に残っているという回答が得られた(図4-2)。また、記憶に残るおやつ上位3つの具体的内容と種類、理由に関する問いには、6名が最も(1番目に)記憶に残るおやつとして具体的な駄菓子の商品名とともに「50円おやつ」を挙げており、また1番目から3番目までの累計ではアイスや具体的な商品名をあげたせんべい・



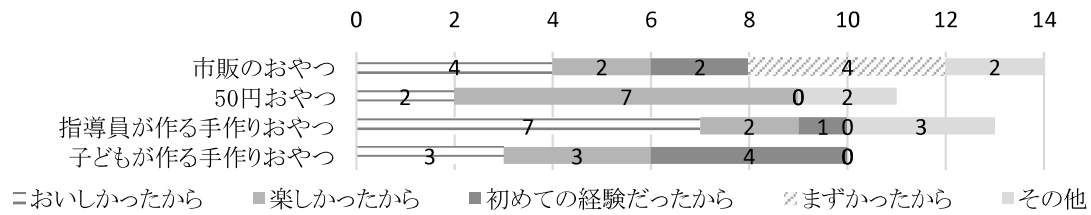


図4-4 記憶に残った理由(MA) (n=12x3)

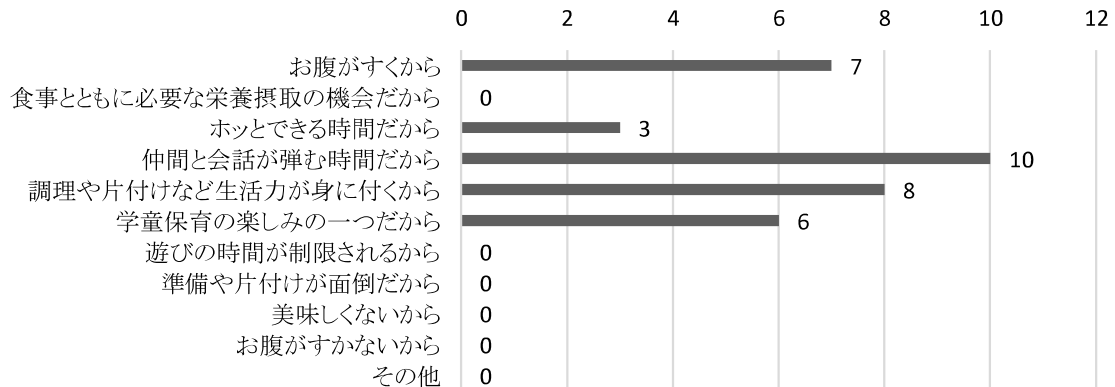


図4-5 おやつが必要性的の有無を判断した理由(MA) (n=12)

チョコレート菓子など「市販おやつ」が最も多かった。そしてフライドポテトやラスク、卵スープなど「指導員が作る手作りおやつ」や春巻き、パイなど「子どもが作る手作りおやつ」の意見も見られ、いずれの形態のおやつも記憶に残る要素があったことが把握された(図4-3参照)。記憶に残った理由としては、「市販のおやつ」では「おいしかった」という肯定的な味覚と「まずかった」という否定的な味覚によるもの、「50円おやつ」では駄菓子屋で買い物をするという行為を通した「楽しかった」というもの、「指導員の手作りおやつ」では「おいしかったから」という肯定的な味覚によるもの、「子どもが作る手作りおやつ」については「初めての経験だったから」という経験によるものが理由として多く挙げられていた(図4-4参照)。

#### 4-3. 学童保育でのおやつ時間の必要性

「学童保育でおやつ時間は必要だと思うか」という問いに対しては12名全員が「思う」と回答した。また、その理由について図4-5のとおり選択肢を設けたところ、「仲間と会話が弾む時間だから(10名)」、「調理や片付けなど生活力が身に付くから(8名)」「お腹がすくから(7名)」、「学童保育の1つの楽しみだから(6名)」「ホッとできる時間だから(3名)」の順に多く、「食事とともに必要な栄養摂取の機会だから」という選択肢は選ばれなかった。またおやつが必要性的への考えの幅を広げるため「遊び時間が制限されるから」などネガティブな選択肢も準備したが選ばれることはなかった。

## 5 まとめ及び考察

### 5-1. 学童保育におけるおやつ提供の実態と指導員の意識について

指導員は季節感に合わせた食材を提供したり、挨拶や食事の姿勢、片付けなどの食事のマナーを伝えるなど「教育面」からアプローチするとともに、子どもたちがメニューを選んだり、買い出しに行ったり、手作りしたりするなど「主体的」におやつに関わることができる機会を設けていた。またおやつ時間が、子どもたちにとって楽しく、みんなが揃うコミュニケーションの場になるよう意識し、内容や、開始時間

を調整していることが把握された。

ただし、脱ゆとりにとまなう学校の長時間化や宿題量の増加が進む中で、子どもたちに遊びに熱中できるまとまった時間を保障し、かつ家庭での夕食に影響を与えない時間にみんなが揃うおやつ時間を設定することが困難になってきているという課題も見えてきた。

### 5-2. 学童保育でのおやつ時の子どもたちの様子について

自由時間には思い思い別々の遊びをしていた子どもたちも、おやつの中には同じテーブルを囲み、おやつについて共通の話題を通して、異年齢集団で会話する姿がみられた。おやつを選ぶことができたり、調理・味付けをできるなど、おやつに対して子どもたちが主体的に関与できる機会が多いほど、集団での会話も弾みコミュニケーションの場が生まれることが考察された。

ただし、一方で学童保育では子どもたち一人ひとりが自分の気持ちや意見を表現することが子どもの権利として保障され、無理なく参加できるようにすることが必要である<sup>9)</sup>ことから、おやつ時間を決めて全員が揃って食べることをルール化するのではなく、「今の遊びを切りのいいところまで続けたい」など個々の子どもたちの思いにも心を寄せ、柔軟な対応をとることが望まれる。

### 5-3. 学童保育のおやつに対する卒所生の評価について

卒所生の回答者のほとんどが学童保育のおやつを記憶していた。そのうえで、おやつは必要な時間だと認識し、特に「仲間と会話が弾む時間だから」、「調理や片付けなど生活力が身に付くから」という点を評価していた。今回、調査対象者がOB・OG会の会員に限定され、対象年齢層の卒所生のうち、約半数のみを対象としていることや、回答率が5割程度であることから結果には多くのバイアスがかかっているといえる。しかし、人間関係の希薄化が課題となる今日において、OB・OG会というつながりを今も持ち続けている者たちからのこれら意見には、大きな説得力があるともいえるのではないだろうか。

### 5-4. 今後の放課後児童対策におけるおやつのあり方

学童保育でのおやつは、食事で不足する栄養素を補うだけでなく、集団生活の中でのコミュニケーションのツールとしてや生活力を身に付ける機会として大きく位置づけることや、子どもたちが主体的な生活を送る機会となりえることが指導員及び子どもの実態・意識から把握された。

現在、総合的な放課後児童対策「放課後子ども総合プラン」として留守家庭児童に限定しない形で放課後児童対策を実施する自治体の中には、大阪市の「児童いきいき放課後事業」のようにおやつの提供がなかったり、東京都江戸川区のように、家庭から持参することしか認められていなかったりするため、留守家庭児童の保護者から、おやつ提供についての要求がたびたび出されている<sup>注5)</sup>。おやつは、放課後児童クラブ運営指針において示されるよう留守家庭児童の日々の栄養面や活力面で必要であるのみならず、児童の社会性や生活力を向上させ、集団の中で子どもたちが主体的な生活を送る上でも、重要な機会になると言える。よって、放課後児童対策内では、おやつの提供を制限したり、家庭から持参させて簡易的に済ませるのではなく、指導員が主導し、おやつを活動計画の中に位置づけることが重要であろう。放課後児童対策に関わる指導員は、そのためにも、食中毒など衛生管理や、食物アレルギーに対する知識・技能<sup>注6)</sup>を身に付け、すべての子どもたちの安全性を確保できる専門性を身に付けることが今後求められる。

### 注

注1) 子ども・子育て支援新制度にとまなう、厚生労働省は2015年4月から放課後児童クラブの質の向上を図ることを目的に、「放課後児童クラブの設備運営に関する基準」とともに「放課後児童クラブ運営指針」を策定し、2017年3月には「放課後児童クラブ運営指針解説書」も発出された。解説書によると、運営指針は以下3点の特徴があげられる。①「最低基準」ではなく、「全国的な標準仕様」として作成した。②放

課後児童クラブの役割及び機能を適切に発揮できるよう規定した。③異なる専門性を有して従事している放課後児童支援員などが子どもと関わる際の共通認識を得るために必要な項目を充実させた。

注2)「学童保育」は児童福祉法に「放課後児童健全育成事業」として位置づけられ、厚生労働省では「放課後児童クラブ」と呼ばれている。また地域によって「育成室」「学童クラブ」「留守家庭児童会」など名称がさまざまである。本研究では、これら名称を包括する「学童保育」を用いる。

注3) 厚生労働省「放課後児童クラブ運営指針」2015の「第2章 事業の対象となる子どもの発達 4 児童期の遊びと発達」より

注4) 全国学童保育連絡協議会「学童保育の実態と課題-2012年度実態調査まとめ-」p.153, 2013において、おやつが提供されている自治体が96.3%、うち指導員が業務としておやつを提供している施設が76.9%でそれ以外は保護者が準備しているという結果が示されている。

注5) 大阪市「児童いきいき放課後事業」では、大阪市H.P.の「お寄せいただいた「市民の声」いきいき放課後事業について、公表日2017年7月31日（閲覧日2018年1月31日）

<http://www.city.osaka.lg.jp/seisakukikakushitsu/page/0000405865.html>

<http://www.city.osaka.lg.jp/seisakukikakushitsu/page/0000405887.html> などにおいて、留守家庭児童へのおよつの提供や持参許可の要望が出されている。また、江戸川区では、江戸川区議会：第95号「すすくすくスクール学童クラブ登録における補食実施事業を2012年度以前の実施方法に準じて再開することを求める陳情」（受理年月日平成29年7月21日）（付託年月日平成29年9月26日）において、2012年度に一体型によっておやつ提供が廃止、その後の要望により持参のみ許可となったが、保護者による継続的な準備が困難なため、施設でのおやつ提供再開を要望している現状が示されている。

注6) 例えば、愛知学童保育連絡協議会と認定NPO法人アレルギー支援ネットワークが合同開催した「学童保育におけるアレルギー対応研修会（2018年1月30日・ウインク愛知）」で紹介された「学童保育指導員のためのアレルギー対応のてびき」・「学童保育指導員のための加工食品へのアレルゲンの確認のし方」のリーフレットや、「学童保育におけるアレルギー対応実践報告」は、今後の放課後児童対策でのアレルギー対応に大きな視座を与えるものになるだろう。

## 参考・引用文献

- 1) 上田玲子他「新版子どもの食生活—栄養・食育・保育—」ななみ書房、P.101、2011
- 2) 堤ちはる他「子育て・子育てを支援する 子どもの食と栄養」萌文書林、P.137-142、2011
- 3) 寺嶋昌代「学童保育室のおやつ調査」東海学院大学紀要、第3巻、pp.67-76、2009
- 4) 吉村弘太「学童保育におけるおよつの実態調査」日本学童保育学会紀要、第7巻、pp.63-70、2017
- 5) 高橋比呂映・平本福子「宮城県の学童保育におけるおよつの現状と課題」宮城学院女子大学生生活環境科学研究所研究報告、第46号、pp.33-42、2014.3
- 6) 秋武由子・岡俊江 他「放課後児童クラブの生活環境整備に関する研究 その2 北九州市の放課後児童クラブにおけるおよつの現状と課題」福岡教育大学紀要、第60号第5分冊、pp.207-213、2011.2
- 7) 秋武由子・柳田あやの 他「放課後児童クラブの生活環境整備に関する研究 その6 およつの量の自由度と食べる空間」福岡教育大学紀要、第64号第5分冊、pp.201-206、2015.2
- 8) 秋武由子・鈴木佐代 他「放課後児童クラブの生活環境整備に関する研究 その7 台所整備に向けたおよつの提供と保管の事例分析」福岡教育大学紀要、第65号第5分冊、pp.151-157、2016.2
- 9) 厚生労働省「放課後児童クラブ運営指針解説書」第3章放課後児童クラブにおける育成支援の内容、p.75-76、2017